

＜今日の説教のポイント 出エジプト記 32 章 1～14 節＞

①なぜ、そんなに不安がるのか？ 神様を信頼しきれない私たち

「モーセがなかなか山から下りて来ないのを見て」(1)。私は、この箇所を読むたびに、「私たち人間の姿をよく言い当てているなあ」と思います。と言うのは、まず、私たちが不安に陥りやすい存在であること、そして、そういう時にどういう姿になって行くかをよく描き出しているのではないのでしょうか。ここでは、頼りにしているモーセが山から戻って来ないと、人々はそわそわし出すのですが、私たちも結構不安に陥りやすい、しかも考えてみると、「これは確かだ」と思っていたことが一つグラついただけで、途端に心配で一杯になりやすいのではないのでしょうか？ この時も、実際には、何も不安に思う必要はなかったわけです。もう少ししたらモーセは帰って来たのです。しかし、それを待てなかった。不安になり出すと、どんどん悪い方向に考えるようになって行く。これは私たち自身の姿でもあるのではないのでしょうか？

②この金の子牛の像がエジプトから救い出して下さった神？

さて、今日の聖書の箇所で、もう一つ注目しておきたい点があります。それは、不安に陥った人々も、その人々の求めに応じて金の子牛の像を作ったモーセの兄である祭司アロンも、どちらも、この金の子牛の像を「エジプトの国から自分たちを救って下さった神だ」と言っている点です。彼らは単純に、聖書の神、ヤーウェという名の神から別の神に乗り換えたということではないのだということです。エジプトから救い出して下さった神様を我々は忘れたわけではない、むしろ覚えているのだと主張しているのです。すなわち、私たちは、真の神様を知って、信じていると思っても、そうではない信仰に陥っている可能性があるのだということです。(説教で続きを)

③モーセの懸命のとりなし — イエス・キリストに続く救いの道！

神様の怒りは燃え上がりました。しばらくの間も神様を信頼して待つことができず、勝手に偶像を作って、これが自分たちの『神々』だと言って拝んだのですから。しかし、その神様の怒りをなだめたものがあります。モーセのとりなしです(10節の言葉の真意は?)。聖書全体は、この取りなしの最先端、イエス・キリストに向かって行くのです。